

環境絵本のすすめ

乾 淑子

北海道東海大学

Picture Books for Environmental Education

Yoshiko INUI

Hokkaido Tokai University

(受理日2006年8月7日)

1. 環境絵本とは何か

現代の日本では絵を主体とする子供向けに作られた書籍を「絵本」と称するが、これを分類して「科学絵本」「物語絵本」「伝承絵本」などと区分けすることがある。近年「環境」を扱ったものが散見され、これを「環境絵本」と称するか否かは、浅学にしてつまびらかではないが、筆者の管見の中で、「環境絵本」と呼びたいものについて述べる。

まず一般的に「科学絵本」と分類されるものの多くは「環境絵本」とも称することができよう。例えば、かこさとし著・若山憲絵「たねからめがでて」、菅原久夫文・高森登志夫え「はるのたんぼーざっそうのくらし」、稲田務え・宮武頼夫ぶん「なつやすみ虫ずかん」などがある。

これらは自然環境に関する知識を児童生徒に与えるという意味で、理科教育的な環境絵本であると言える。例にあげた絵本はたまたま筆者の手元にあったというだけで、特別にこれでなければならぬという必然性によるものではない。この種の絵本は巷間に山積しており、どれも皆、貴重な自然体験啓蒙の一翼を担うものである。「巷間に山積」という表現は、決して「平凡でつまらない」という謂いではなく、「貴重な啓蒙書があまた存する」という謂いである。それはつまり、自然界は余りにも豊かであり、それを子供たちに伝えようと企てるなら、10万冊、100万冊の絵本を描いたとしても十分ではないからである。

アリやイルカやゾウの生態を知り、ハコベやタンポポやベリーを楽しみ、子供たちは自然界への目を開かれる。便利で快適で豊かで人工的な環境の中で育つ子供たちが、ファンタジーのように、ベットのよう、または単なる未知への好奇心から「自然界」に魅力を感じたとしても、残念がったり、非難したりすることはない。囲い込まれた都会的な日常の外にある未制御の「自然」の世界を開くというだけで、功を奏したといえるのではないだろうか。

もちろん、それらの絵本に接しようが接しましませんが、子供たちは教科書によってすでにそれらの「自然」を学んでいることが多い。そういう意味ではそれらの絵本が子供たちに自然の世界を開いたというのは誤りであろう。しかし、絵本と教科書とは全く異なる機能を有するメディアである。

体系的に順を追って学び、広い分野の知識を網羅的に吸収することを求められる教科書にはなじめない質(たち)の子供たちのすべてが、知的に劣るわけではない。知的なことに対する関心を抱き、情報を我が物とし、それを温める力があるにも関わらず、網羅的な学び方に向かない子供たちもいる。絵本にはそのような子供たちにも働きかける力がある。

その力のよって来る源の一つは「絵」であり、もう一つはそれが「一冊である」ということではないだろうか。「絵」の有用性については、ここで云々するまでもなく、良く知られる所である。人間の得る情報の80~90%は「視覚」が伝えるもの

であり、「視覚」の中にはもちろん、文字によって表現された言語も含まれるが、そのほとんどは言語的には叙述も分析も不可能な色や形、陰影、奥行きである。動物や植物や景観は、単なる絵画ではなく、色や形にのみ還元し得るものではない。それは匂いや手触りを伴うはずのものであるが、それでも文字のみによるのに比べれば、格段に多様な情報を絵から学ぶことができるのである。

また「一冊である」ということは関心の集中を生み出しやすいメディアだということである。日本中に何千種類あるか分からない科学絵本がそれぞれにザリガニとか星座とか一つのテーマを語っている。何もかもに網羅的な関心を持続することは困難であっても、どんな子供でもお気に入りのテーマを見つけることができる。よって教科書におけるような挫折感を味わうことなく、そのテーマに没入することができるのではないだろうか。

2. 物語絵本における環境絵本

さて、「物語絵本」における「環境絵本」とは何かを問う前に、どのようなものがあるか、具体的にあげてみよう。

よく知られた例として、いぬいとみこ作・津田柳冬絵「トビウオのぼうやはびょうきです」があり、これは1954年にビキニ環礁で第五福竜丸が水爆実験に巻き込まれた事件を扱ったものである。おとうさんトビウオは実験に巻き込まれて即死し、トビウオのぼうやは珍しがって海上をピョンピョン飛び、水爆実験の後の白い粉を身に浴びたために原爆症を発症し、おかあさんトビウオは手だてを求めるがなすすべがない。というお話である。卵から孵るトビウオが両親と三人で仲良く暮らすというような設定など、実際にはありえないことは誰でも了解されるが、児童向けの文学で普通に用いられる擬人化によって、読者に感情移入を誘う作りになっている。大人からすれば、類似した状況に追い込まれた人間の親子は沢山いたであろう事実をあえて魚に模する必要の云々を問うのかもしれない。しかし主人公を人間とすることで、登場人物の所属する民族、社会などが明らかになり、読者とは異なった人々であることが意識され

るより、動物などに擬した方が親近感を得やすいという側面がある。児童文学における擬人表現の問題については本論の扱いきる所ではないので、割愛したい。



バージニア・リー・バートン「せいめいのれきし」は「ちいさなおうち」で世界的に知られる著者が、宇宙の誕生から現在の人の暮らしの進化までを描いたものである。ちいさなおうちの周辺が徐々に都市化して息苦しくなり、そこから郊外に移転してもらって生き返ったちいさなおうちの物語が、単にノスタルジックでほのほのとしたものであった訳ではなく、筆者の環境への深い関心のうちから生じたものであることが理解される。

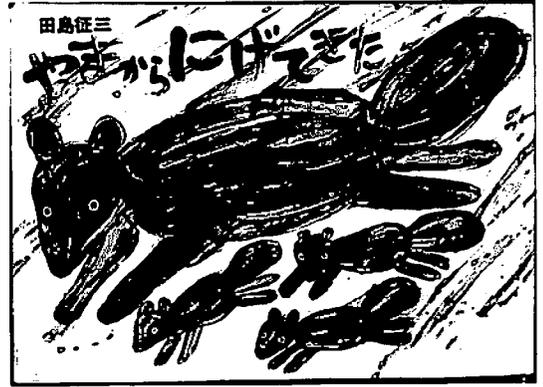
イエルク・シュタイナーぶん・イエルク・ミュラーえ「ふたつの島」は二つ並んだ島の盛衰を描いている。地下資源に恵まれ工業的な開発に邁進した大きな島はやがて自然災害のもとで自滅し、反省して元の姿を取り戻すというお話である。これに類似した物語の絵本は日本の作者も描いており、いくつかの類本が見られる。

川端誠「森の木」は貴重な素晴らしい果実を、人工的な環境を作って増産を重ねた結果として、その木の生命システムが狂って怪物化してしまうというお話である。巨大化した木は温室を壊し、暴風を招き、村を破壊するが、やがて再生を示唆する小さな芽が生える。単なる絵ではなく、立体的な絵画技法を用いた表現に魅力を感じる子供もいるだろう。その濃厚な表現が、木の異常な生命

力を感じさせるのに力ある。このような点が文字のみによる童話でなく、絵を用いる絵本である必然でもあろう。

石牟礼道子ぶん・丸木俊/位里え「みなまた海のこえ」は水俣病を語り、描いて定評のある作家と画家の組み合わせによる。胎児性水俣病の患者である小さな女の子とその家族がつぎつぎに倒れて行く過程をお銀という狐が語る。胎児性水俣病の悲惨はユージン・スミスの写真などによって良く知られるが、それと平行して、海や山の荒れる過程を狐が体験する。この絵本を大学の講義で使用すると、石牟礼道子の独特な語り口調にはついて行けないという学生がかなりいる。その一方で、石牟礼の世界に入ることが困難ではない幼児や児童も多い。方言を多用し、韻を踏み、繰り返しの多い文体であるが故の音楽性、土俗性の問題であろう。説明的な散文でなく、韻文的な要素の強い文章であるということの意味の一端がここで提示される。このような場合には、理解に受容が先行するということが顕著になる。環境教育の最終的な目標である行動の変革を考える時に、単なる知的な理解以上に、人を動かす感性的な働きかけということが問題とされる。一考するべき課題ではある。

田島征三「やまからにげてきた/ゴミをばいばい」は、本の両側から読み進めることができる。「やまからにげてきた」という表紙を繰ると、大小さまざまな動物が山から逃げており、それは山に巨大なゴミ処分場ができたからで、そのゴミは人々の大量消費によるものであることが示される。「ゴミをばいばい」という表紙を繰ると、人々が消費を楽しみ、気軽にゴミを捨てる様子が描かれ、その結果として巨大なゴミが発生し、作った山中のゴミ処分場の周辺の動物たちが逃げ出す、ということが分かる。これはまさに絵本というメディアによってのみ成し得た表現である。文字だけでは順番を変えて両面から読むというような仕掛けは成功しない。また、この絵は濁った複雑な色で描かれているが、これは絵の具の排水を流さずに何回も再利用することによって生じた色である。東京都の山中、日の出村の広域ゴミ最終処分場開



題に深く関わり、「水からの速達」という映画でも知られ、実践者、行動家である作者にしてのみ得たアンディアである。思想・生活・表現の一体化が示された希有の例であると言えよう。

ここまで、6冊の物語絵本に分類される環境絵本をあげてみた。これらは必ずしも現実をそのまま反映し、説明するのではなく、作者なりの世界観の中で反芻し、再構築された環境問題の表現である。それが「物語」であるゆえんである。逃れようもなく、巨大で普遍的な環境問題を語り伝えるのに虚構を用いるということの是非はあろう。しかし、虚構であるが故に伝えてしまう真実は、単なる事実を越えるのではないだろうか。

ユージン・スミスの撮った有名な胎児性水俣病患者の入浴写真が封印された。悲惨を伝えるのに非常に大きな役割を果たしたこの写真の持つ意味を承知した上で、「もう十分に人目にさらされた」とおっしゃったご家族の気持ちを思う時、私たちの脳裏にはより鮮明にその写真が思い起こされる。もう見ることでできない写真、虚構であるが故の真実、これこそが人間の持つ想像という能力であろう。

参照絵本

イエルク・シュタイナーぶん・イエルク・ミュラーえ・おおしまかおりやく、1982、ふたつの鳥、ほるぷ出版。

石牟礼道子ぶん・丸木俊/位里え、1982、みなまた海のこえ、小峰書店。

稲田務え・宮武頼夫ぶん、1988、なつやすみ虫ず

- かん，福音館書店。
- いぬいとみこ作・津田櫛冬絵，1982，トビウオの
ぼうやはびょうきです，金の星社。
- かこさとし著・若山憲絵，1988，たねからめがで
て，童心社。
- 川端誠，1993，森の木，リプロポート。
- 菅原久夫ぶん・高森登志夫え，1984，はるのたん
ほ，福音館書店。
- 田島征三作，1993，やまからにげてきた ゴミを
ぼいぼい，童心社。
- バージニア・リー・バートン文・え・いしいもも
こやく，1964，せいめいのれきし，岩波書店。